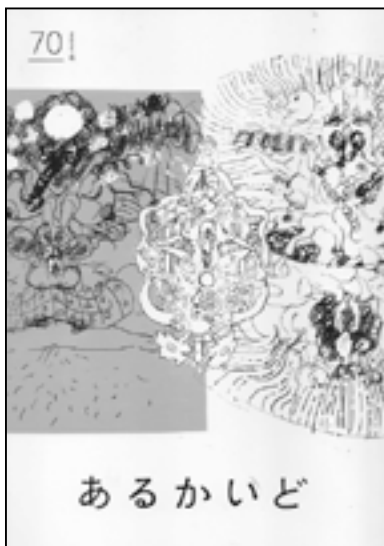


## ●「アルカイド」(大阪府) 70号

この誌は以前地味だが手堅い作品もかなりあった気がし、人生の深い軌跡を味わえたど記憶するが、今は全体に若返って、うまさや読みやすさが目立つ新装感が被うようになってる。それらが表面の新しさや親近感に流れて、問題や生命の奥に入っていない恨みがやや残る。

高原あふち氏の「卵を抱えて」は、不妊問題を軸に爽やかな日常仕立てにして新鮮な文章でもしらく読ませていく。その技量レベルは高く、読者を飽きさせない。ただ、この牽引力は枝葉の魅力であって、本質的な深さに到達しないもどかしさがある。このテーマは女性にとつては普遍的な主題である以上、二つのものが要求されるだろう。誕生と死に関わる問題をどこまで生命の相として掘り下げられるか、またそれを個人の体験の唯一性の中にどのように発見していくか——この二つがしっかりしていないと、純文学作品としては成立しにくい。最後まで「黄体ホルモンの数値が」「ついに正常値になった」という終わり方はいかにも弱く、とても「誕生」の奥にある生命の秘密には達しない。こう考えてくるとタイトルも一見おもしろく、魅



力があるが、深淵を匂わせる言葉としては奥に乏しい。文章は現代風の華やかさがあり、読ませる豊かさがあるので、それだけに流されず、テーマを捉え切れば、飛躍が期待できる書き手だろう。準優秀作。

この誌はどの作品もまとまっており、文章の水準は皆高い。編集や合評会は丁寧にしつかりなされている感じがする。七〇号の蓄積に実がある。

猿川西瓜氏の「バニラ」は、独特の発想で描かれる一種の未来小説だが、「図書館の中身が、今、ほとんどカラになった」という着想などおもしろい。「バニラ」の匂いが小説のテーマにどう関わるのか、その収斂のさせ方に無理があるが、一つコツを掴むと、いい世界が展開していきそうではある。持続してこの未来社会を掘りさげていってほ

しい。

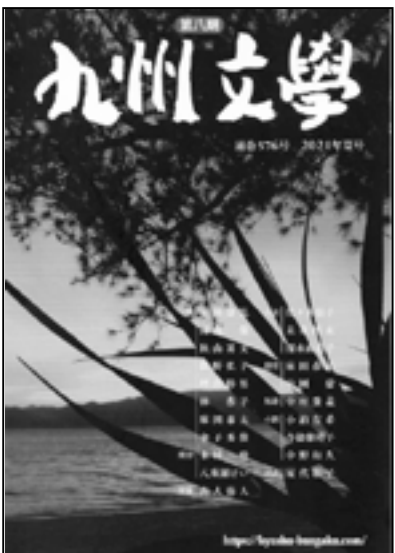
## ●「九州文学」(福岡県) 576号

新しい編集体制になった「九州文学」は、表紙も一新され、全体に手取りやすくなった親近感があるが、それぞれの小説の頭に要約紹介のような短文が付いているのはやりすぎで、不要の味消しになっている。また相変わらず柱がページ下に付いていて、見にくい。これはどの同人誌にも当てはまるが、商業文芸誌の「文芸界」に倣って柱を下に付ける悪習が蔓延してしまった結果がいまだに残っている。本来柱は上にあるべきものである。ページに隣接し混同しやすい点も、難がある。また各ページ右下に「九州文学」/576「2021年夏」とあるのも、表紙で十分わかることなので不要で、読者にとっては重複感が煩わしいだけだ

う。

「海影」(中野和久)は、珍しいヨット航海の力作小説である。鹿児島島の南西に延びる諸島をトカラ列島から奄美大島までの巡航の途中に嵐に襲われ、転覆するストーリーを軸にしていて、しつかり書けている。遭難のヨットの内部は迫真力がある。ただ、導入部が露天風呂となっているのはいただけない。海洋小説であるなら海で始まるべきで、全体との関連が薄い場面から始めるのは不利である。またこの小説では、愛妻の死が大きな動機になっていて、海へ散骨のために航海するので、これをもっと早くに出すべきで、後半に出てくるのはあまりに遅すぎる。また最後が遭難のピークで終わっているのは、助かったのか、このまま死んでいくのか、わからないままなのは、収束感を欠いている。妻の死が航海の動機であるならば、この小説の結末は「助かる」方向にしか見出せない。死を乗り越えることが、妻の遺志でもあるだろうし、文学としての果実をもたらすことになるからである。偶然による救いの手の中に、深い摂理を感じることが、この小説の真の奥行きを作らさるう。書き直して小説として成立する姿に持っていく作業が残っている。いい題材だけに惜しまれる。タイトルももう一つ決まっていな。このままでは準優秀作。

歴史小説「錯乱」(小泊有希)は、戦国期の九州の雄大友宗麟の一時期の錯乱を描いて、鮮やかである。毛利の九



州へ伸ばす触手に対しての反応がよく捉えられている。これに前後の成り行きが少し加えられて九州史の全体感が添えられれば、歴史のうねりは一層大きく体感できただろう。これも準優秀作としたい。

●「海峡派」(福岡県) 152号

「海峡派」は継続号数は全国ベストテンに入る伝統誌で注目しているが、最近では少し陰影の薄い作品が目立つように感じる。この傾向に危惧を覚えていたところ、最新号に高崎綾子氏の「木語」を読んで伝統誌らしい深みを再認識した。筋の流れは夫婦間の不協和音から精神疾患になり別居によって自分を取り戻そうとする女性の回復の過程だが、最初の転居の部屋の描写から始まって公園の描写などが卓越している。この描写に厭世的トーンが流れていて、孤独感と相俟っていい旋律になっている。この魅力は大きく、それによって深く引き込まれていくのだが、人物が出てきて、言葉を交わすようになると、不思議に会話が生き生きと弾んでしまい、それまでであった描写の短調のトーンが変わってしまう。これだけの描写力があるのに、会話によって逆方向へ向かうのが、惜しまれる。これは会話の言葉に込めるものが、平面的であることによってと思われる。「海峡派」の書き手の多くが、会話を会話として流している、その奥にあるものに目を向けない傾向がある。会話は確かにそれだけでおもしろい、弾む性質も持っているもの

のない力量ではち切れている。

巻頭作の「鉄棒の前で」は、神戸のエルマール文学賞も受賞している水無月うらら氏の作品で、炭酸飲料のような弾ける文体にセンスのいいストーリーが組まれていて、洒落た味のある姿を立ち上げている。鉄棒の前にいた女性を旧友と勘違いして、そこから長く連絡を絶っていた旧友に電話をする話の起こし方は鮮やか。高校時代、互いに憧れていた教師が実は性的悪戯の常習犯だったことを知って、それまで燻っていた蟠りが一気に溶けて、あらためて卒業してからの人生を振り返る流れは快く振り切ったスイング感がある。言葉の連なりを高校生のような未熟感の色で染めていく点が魅力でもあり、物足りない点でもある。ただし、作り方はうまくなっている。この作家は、他の同人誌にもいくつも発表していて、紡ぎ出さずにはいられない旺盛な創作力は、注目すべきものがある。いつか本物に化けることを期待して推薦作としたい。

この誌の発行の中心になっている黒住純氏の「ナガレの教室」は、物語をグイグイ進めていく筆力はすばらしいものがある。特に前半の牽引力は滑り出したら止まらない奔流の勢いを持つ。障害者となったガールフレンドを追って一流高校の入試を放棄して彼女と同じ高校に行くくんだりやそこで「ナガレ」という天才的個性と出会って、彼の開発したという投資ソフトを自身も手に入れるまでではない。し

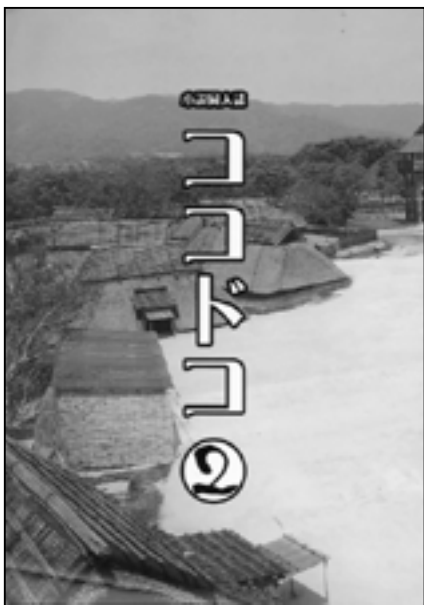


だが、氷山のように隠れた下部もある。この小説はテーマからしてこの隠れた部分を大事にしないと、全体の味が変わってしまう。また浮浪者っぽい若者から荷物を預かるのだが、この若者が生き生きしすぎていて、孤独な女性を救いに来る幻想としての人物にしては、あまりに明るく動いて違和感がある。これら処理するのはたいへんな作業になると思うものの、この小説全体の捨てがたい魅力は否定できない。修正がうまくいけば優秀作に推したい作品だ。

●「ココドコ」(大阪府) 2号

この誌は、創刊2号目の新しい誌でフレッシュな空気に満ちている。誌タイトル「ココドコ」は奇妙だが、わからないようなこの言葉をおつきらぼうに使うところも新しさかもしれない。書き手も皆創作意欲が旺盛で、ほとんど差

かし後半になってそれで大損をし、家庭が崩壊しかけて警察沙汰になり、すべてが壊れかけてまた修復され、日常に戻る下降的な展開はいただけない。むしろその投資ソフトをプラスの方向に動かして、何億円も稼いでしまう方が、おもしろくなったと惜しまれる。家庭を見直す方向に内側から折れてしまったのは、フィクションの翼を自ら折ってしまったようなものだ。もともと前半は、リアリティを半分犠牲にした架空の滑空感で出発している。この翼で滑り出したのなら、最後までこの虚構創作を発展の側で勝負してほしかった。高校生で何億もの大金を手にする危険は、当然恋愛や友情や家庭や社会をも根底から問い直す位置に立たされるからである。そこからの批判の方がエリート



親の生き方をも指弾できるだろうし、世の中の様々な矛盾にも抗議できるだろう。その位置から「ナガレ」と二人して社会や受験体制を批判し、そして最後に当然挫折し、倒れる方が、ドラマとしてはるかに大きくなったはずである。フィクションの役割はそういうところにある。この小説は四五ページにわたり原稿用紙一三〇枚もの長さがある。後半をしっかりとさせれば二〇〇枚くらいの長さになっただろう。もともと長編小説の素材である。おそらく筆者もそれは感じていたはずだが、時間に追われ、やむなく矮小化してしまったと察する。力のある書き手なので、社会への批判精神を大事にして、完成を目指してほしい。今のままで準優秀作。

●「琅」(神奈川県) 39号

「琅」はユニークな立ち位置を示していて、巻頭の「論壇」として「コロナ禍迷走を憂う」(金子哲也)が二〇ページにわたっている。またエッセイとしてある「たかが川柳されど川柳」(上野一彦)は最近の世相を揶揄するものを集めて一〇ページをなしている。「怖いのはコロナじゃないよココロだよ」「オリンピック パッハ一人が指揮を執る」などおもしろい。また「私の文学散歩(一六) 逗子・葉山に、鏡花の足跡を探す」(松村茂治)も一四ページに及ぶ文学紀行である。おもしろいのは巻末のエッセイで、「幼い頃の忘れ得ぬ味」(浦野裕司)として、「冷めたビ

フテキ」や「石焼き芋」や「銀座ウエストの焼き菓子」など、体験の中で「最高の味」を書き綴っている。確かにそういう味は、存在するだろう。新入社員の頃初めて食べた「冷めたビフテキ」の味は神戸の老舗店の最高級ビフテキよりももっと「うまかった」とする実感はよく伝わってくる。

小説は一篇だけだが、「椿の木の下で」(ゆとろ満)は、過去の朝鮮人家族を描いて、鋭い刃を突き付けてくる。文章は平板で、メリハリもなく、日常的に事実を語るだけだが、書かれている内容は、逆に胸を抉ってくる。戦中に日本に鉱山労働者として送られて来た朝鮮人が帰り損なうままに日本にいるが、聡明で思いやり深い日本女性と結婚する。しかし生まれた子供を周囲の子供たちが虐め、差別して遊びから疎外する。それに対しての父親の朝鮮人の言葉が胸を打つ。「人間にとって一番大切なものは誇りだよ。自分や自分の国を大切に思い、他のだれにも負けないで胸を張って自慢にできることだ。朝鮮人は朝鮮人の、日本人には日本人の誇りがある。それをなくしたら人ではなくなるほどの大切なものさ。生きる価値と言ってもいいよ。それ故その誇りを傷つけられることは一番の恥になるんだよ。だから誇りを傷つけられるようなことはしてはいけないんだ。きみたちが先ほどうちの(子供)明徳にしたことは明徳の誇りをひどく傷つけたんだよ。しかし、本当は明徳以

上にきみたちの心が傷ついているはずだよ。なぜならきみたちがやったことは人の道に外れた恥ずかしい行いだからだ」

特に強烈なのは朝鮮民謡の詞である。

「口の利ける野郎は 監獄に

野良に出る奴ア 共同墓地に

餓鬼の一匹も生める女つちよは 色街に

奮の担げる若え野郎は 日本に

こんで何にもかんも素っからかんよ

八間新道のアカシア並木 自動車の風に浮かれている」

結局この朝鮮人家族は北朝鮮へ移住していくのだが、過去に日常の周りに多くあった朝鮮人の姿をよく浮かび上が

この誌の書き手は実力者揃い。鍛えられているせいか、どの小説も書き出しはうまい。すぐ流れに乗せる歯切れのよさがある。

●「メタセコイア」(大阪府) 17号

巻頭の南田真氏の「寡黙な拳」は、同人雑誌としては珍しいボクシングの世界を描写している。ボクシング・ライターの目を借りて話を進めているが、ジムや興業主やマスコミ、世界選手権の舞台裏など幾相もの実態もかなり捉えていて、話の展開は淀みなく、グングン巻き込まれていく。世界へ挑戦する向上モーターも強く、最後まで一気に読ませる筆力は、優れた技量を示している。場面の終わり方場の転換など、うまい。ストーリーは、世界戦へのステップとしての試合において、いったん不正判定によって、敗北するが、ライターの活躍によって再戦が実現し、最後の最後に逆転勝ちするフィナーレとなる。活劇として、手に汗握る盛り上がりで、スリルは堪能させられるものの、読



み終わって、その結晶度にもう一つ不完全燃焼の煙りが残る。それがなぜか考えた。タイトルの「寡黙な拳」の「寡黙」はこの新人ボクサーが東北の津波の被害者の過去を背負っていることに拠っている。「両親も津波で死んで、その後は家を持たずに転々とする孤独な生を運命付けられる。この少年期の過去が、リングの格闘のここぞというときに一つの力となって湧出してこないところが、収斂感の乏しさに繋がっているように思われる。せっかくなら東北津波を引きずっている主人公に設定したのに、それが後半十全に反映されていない点に、この小説の決定的なインパクトの欠如がある。およそボクシング小説なり、野球小説なり、剣道小説なりのスポーツ小説は、虚構の世界であるならば、勝敗は自由に構築できる。そこまでのスリルは書き手の腕によって自在に盛り上げられる。要はいかに最後のクライマックスを盛り上げるかということになるのだが、文学としてはもう一つそこに決定的なものが入る必要がある。それはいかにかそこに人間を描き込むかということである。格闘や勝負の迫真力だけならば、テレビやインターネット動画でも伝わってくる。小説にすることは、勝負のその奥にいかにか人間としての火花を放っているかということに尽きる。その火花が真実であり、人間の奥底に生き方として達していれば、勝利しても敗北しても、永遠の火花として胸に残るだろう。この人間個人が放つ生き方としての



火花が大事なものであって、それを捉え切ることが文学だろう。このボクサーにはクライマックスにおいて出てくるべきそれがない。「寡黙」の奥にあるものが拳の一閃となつて怒りの世界そのものを切る——それがクライマックスにおいて放たれるべきだろう。また激しい練習に耐える力もその「寡黙」に繋がっているはずである。「寡黙」の人間像が乏しい。

そこまで直してもらえば、この小説は優秀作に値する。

●「新生」(東京都) 15号

「新生」は文芸同人誌というよりも、高度な知識雑誌の風体がある。その内容は、重要な思考や知識を多く含み、学ぶことが多い、有益な雑誌である。巻頭言においても、主

宰の篤一夫氏がこの五月に発された「日米首脳共同声明」の危険性を指摘している(※341Pに一部転載)。他にも「日本洋服百六十年史」(中尾幸造)、「隅田川に架かる鉄道橋の話」(長野眞)、「風に吹かれて(4) ヨットと水素利用」(松尾晃)、「日本近世後期の人々の生活」(けいのえいち)、「ウィリアム・アダムス(三浦按針)と平戸」(立木正昭)、「私が読んだ世界の名著(第4回)」(宮田岳南)など、啓発される文章がいっぱい。得難い知識が満載である。特に「ヨットと水素利用」は、これからの省エネ時代の航海や交通機関の未来図が写真や図入りで紹介されていて、大いに勉強になった。石油燃料を使わないで現在航海している「オデッセイ号」の話や、風力による水流発電で水素をつくり、貯蔵して、水素燃料電池発電で船

を進める未来型推進船の話など、興味は尽きない。オデッセイ号の斬新な船体写真もあり、太陽電池パネルが甲板に敷き詰められていて、全体が二本のフロートによって浮いている図は、実に斬新な船の未来像を感じさせる。推薦レポートとしたい。

稀有な知識教養・情報交換の誌として、珍重すべき存在である。

▲今季をまとめる。

▲優秀作「木語」 高崎綾子「海峽派」152号

▲「寡黙な拳」 南田真「メタセコイア」17号

推薦作「椿の木の下で」ゆとろ満「琅」39号

「鉄棒の前で」水無月うらら「ココドコ」2号

「風に吹かれて(4) ヨットと水素利用」

松尾晃 「新生」15号

準優秀作

「卵を抱えて」高原あふち「アルカイド」70号

「海影」 中野和久「九州文学」576576号

「錯乱」 小泊有希「九州文学」576576号

「ナガレの教室」黒住純 「ココドコ」2号

(全国同人雑誌振興会)五十嵐勉

